

「帰国子女」におけるアイデンティティの追求

法学部政治学科 3年 E組

31452700

小倉 健太郎

目次

- 1 はじめに
- 2 帰国子女のアイデンティティ
 - 2.1 先行研究
 - 2.2 Third Culture Kids のアイデンティティ
- 3 アイデンティティのゆらぎ
- 4 研究
 - 4.1 研究内容
 - 4.2 研究結果
 - 4.3 考察

1. はじめに

近年、グローバル化・高度情報化社会が進むにつれて、海外で働く日本人の数が年々上昇している。それに伴い、親の仕事で海外へ渡航する子女数も増加傾向にある。平成 28 年度の外務省の統計によると、海外在留邦人子女数（3 ヶ月以上滞在している小学部・中学部の子女）は、全世界で 79,251 人に上る¹。このような親の転勤や自らの意思ではない理由のもと、日本国外での滞在生活を経て日本に帰国した学生を、一般的に「帰国子女」と呼ぶ。

かつての日本では、帰国子女はマイノリティーであったためにいじめや教育面での遅れなど、大きな社会問題となっていたが、現在では国際化とともにごく一般的に認知される存在となった。また最近では、帰国子女枠を設ける学校やインターナショナルスクールなどが増加しており、帰国子女に対する受け入れも積極的、かつ寛容である。しかし、こうしたグローバル化が進んだ現在においても、帰国子女における問題は完全に消滅していない状態である。中でも、帰国子女におけるアイデンティティは注目すべき主題である。

現在、母文化と異文化が混在した帰国子女のアイデンティティは母国でずっと育った人に比べ、異質なものである。実際、海外で長年過ごす、どの国に居住してもその国自体を客観的に見て捉え、自分の属する国、いわば母国を母国とみなすことが出来なくなる帰国子女も少なくない。では、帰国子女が結びつける帰属意識とは一体どのようなものだろうか。帰国子女は自己同一性を喪失している。しかし、アイデンティティとは、本来他者と関わって構築し、自己を形成していくものである。そうであるならば、帰国子女のアイデンティティにおいて、生まれつきを拠り所とする価値はあるのか。その必然性はどのようなときに生じ、どのようなときに喪失感を受けるのか。私は、彼・彼女らの形成されていく臨機応変かつ曖昧なアイデンティティに着眼したい。本研究では、こうした帰国子女におけるアイデンティティについて主軸を置きたい。

まず、何故この主体を研究しようと至ったかについて触れたい。私がこの主題に関心を持った大きな理由の一つとして、自分自身が帰国子女である点が挙げられる。私は、父の仕事上、生後 2 ヶ月で香港に渡り、約 6 年間をその地で過ごした。そして、日本に帰国して 2 年弱を公立の小学校で過ごした後、小 2 から約 7 年間アメリカのコネチカット州で現地校の小学校と中学校で学校生活を送った。半分以上の人生を海外で過ごしており、その中で様々な文化を持つ人々と触れ合ってきた。特に、米国では価値観が形成される時期

¹ 外務省ホームページ『海外在留邦人子女数統計（長期滞在外者）』，
http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin_sj/

を過ごしたため、そこでの生活は私の自己形成において土台となるものであった。そして、このような中で帰国子女が抱える問題を目の当たりにした。現地校で馴染めずに不登校になる者、日本語を話せなくなる者（忘れてしまうもの）、さらには、帰国後いじめを受ける者もいた。私自身も日本に帰国した際に受けたカルチャーショックを鮮明に覚えている。そして「自分とは何か」ということについて考える時が多くあった。私は、香港、そしてアメリカの海外生活でも常にその場所で一刻も早く馴染もうという気持ちがあった。むしろ、日本に帰国した際も早く慣れようとしていたのだろう。そして、自分がどの国に居住していてもあくまでその国の人になろうとしているのであってその国の人ではないことに気づいた。しかし、このようなケースは珍しくなく、私の帰国子女の仲間にも同様に思う人が何人もいた。一般的に、これをアイデンティティが喪失していると呼ぶ人が多い。しばしば、アイデンティティにおいて、「君は日本人ですか、それともアメリカ人ですか」という質問を受ける。しかし、この質問はあくまで私の生来的な情報を聞いているだけであり、日本人であることがアイデンティティの定義だけでは勿論ない。他者と混じり合う相互作用の中で構築されるものである。そして、母国ですっと育っていない彼・彼女らにも、多様な社会的インタラクションを交わし、自己形成を遂げた点でアイデンティティは確立しているのではないかと疑問を感じた。一般的に帰国子女たちの潜在的意識の中で求める「日本人であること」や「アメリカ人であること」は果たして必要あるものなのか。また、アイデンティティとは複数ではなく一つとして確立しなくてはいけないのだろうか。アイデンティティの複数性とは一体どのようなものなのか。以上を踏まえ、本研究では、帰国子女のアイデンティティについて深く研究したい。

本研究を行う上で、帰国子女へのインタビュー調査を実施する。調査対象は、現在慶應義塾大学に在籍する学生である。慶應義塾大学は自分自身が所属している身近な団体であると共に、国際色豊かな学生がたくさん在籍している大学である。交換留学や大学受験において帰国子女枠を設けるなど、豊富な帰国子女生が集まっている。表 1 をみてもわかるように慶應義塾大学における帰国子女の入試だけで約 200 人もの帰国子女を取っており、それ以外にも内部生、AO 入試、指定校推薦の中にもたくさんの帰国子女が混ざっている。在籍する帰国子女の滞在国は多種多様であり、各学生が異なったバックグラウンドを持っている。また、大学生という世代を指定したのは、価値観形成が終了した段階で、自分についての自己分析が可能な年齢であることが大きな理由である。そのため、本研究における帰国子女は、若年期の価値観が形成される時期に海外へ 3 年間以上滞在したものを指す。その上で、過去の帰国子女における文献調査を行い、調査対象者である帰国子女に向けてウェブ調査をする。ここで、私は、帰国子女ではない学生にも自己のアイデンティティについて調査することによって、帰国子女とそうでない者の共通点や違いを明らかにしたい

と考える。また、海外の地域については限定することではなく、幅広い視点で調査を進めることで地域別の違いなども分析することができるのではないかと思う。そして、フィールドワークとして直接インタビュー調査を行うことで、画面上では表現できない彼・彼女らの実体験や声を聞きたい。

2016年3月4日現在
慶應義塾大学入学センター

2015/2016年度
帰国生対象入試結果報告

| | 志願者 | 第1次選考合格者 | 第2次選考 | | 最終合格者 | |
|-------------|-------------|---------------|---------------|---------------|------------|--------------|
| | | | 受験者 | 第1次合格者 | | |
| 文学部 | 51 (42) +14 | 28 (23) +3 | 23 (19) +2 | — | 20 (17) -1 | |
| 経済学部 | 85 (52) ±0 | 62 (39) +7 | 62 (39) +14 | — | 50 (30) +5 | |
| 法学部 法律学科 | 9月入学 | 2 (2) +2 | 1 (1) +1 | 1 (1) +1 | — | 1 (1) +1 |
| | 4月入学 | 41 (25) +14 | 30 (18) +6 | 30 (18) +6 | — | 24 (15) +2 |
| 法学部 政治学科 | 9月入学 | 0 (0) -2 | 0 (0) -1 | 0 (0) -1 | — | 0 (0) -1 |
| | 4月入学 | 45 (30) +10 | 35 (24) +9 | 35 (24) +10 | — | 27 (20) +2 |
| 商学部 | 58 (35) +7 | 36 (24) ±0 | 36 (24) +4 | — | 33 (21) +3 | |
| 医学部 | 6 (3) ±0 | 6 (3) ±0 | 5 (2) ±0 | 1 (0) +1 | 1 (0) +1 | |
| 理工学部 | 学門1 | 11 (0) +6 | 8 (0) +3 | 8 (0) +3 | — | 7 (0) +4 |
| | 学門2 | 3 (0) +1 | 3 (0) +3 | 3 (0) +3 | — | 2 (0) +2 |
| | 学門3 | 6 (4) -6 | 3 (1) -7 | 3 (1) -6 | — | 0 (0) -5 |
| | 学門4 | 6 (3) +1 | 5 (3) +1 | 5 (3) +1 | — | 3 (2) -1 |
| | 学門5 | 4 (0) -1 | 3 (0) +1 | 3 (0) +1 | — | 2 (0) ±0 |
| | 小計 | 30 (7) +1 | 22 (4) +1 | 22 (4) +2 | — | 14 (2) ±0 |
| 総合政策学部 | 9月入学 | 6 (3) +6 | 2 (1) +2 | 2 (1) +2 | — | 2 (1) +2 |
| | 4月入学 | 46 (32) -3 | 30 (23) -4 | 29 (22) -5 | — | 19 (14) -7 |
| 環境情報学部 | 9月入学 | 0 (0) -2 | 0 (0) -1 | 0 (0) -1 | — | 0 (0) -1 |
| | 4月入学 | 21 (11) -5 | 12 (7) -9 | 12 (7) -8 | — | 7 (3) -9 |
| 薬学部 | 薬学科 | 1 (1) -4 | 1 (1) -4 | 0 (0) -1 | — | 0 (0) ±0 |
| | 薬科学科 | 0 (0) ±0 | 0 (0) ±0 | 0 (0) ±0 | — | 0 (0) ±0 |
| 合計 | 延数 | 392 (243) +38 | 265 (168) +10 | 257 (161) +25 | | 198 (124) -3 |
| | 実数 | 204 (119) +22 | 142 (85) +5 | | 1 (0) +1 | |

注：()内は女子で内数，±は前年比

帰国生入試は学部の併願が可能であるため，合計欄は「延数」と「実数」に分けて統計をとっている。

表1. 2015/2016年度における慶應義塾大学の帰国子女入試結果

2. 帰国子女のアイデンティティ

2.1 先行研究

先ほども述べたように、グローバル化が進む現在において帰国子女のアイデンティティは注目すべき主題である。

そもそもアイデンティティとは一体何なのだろうか。「アイデンティティ」という言葉にはさまざまな定義や見解がある。日本では同一性と言われているアイデンティティは、自我同一性、社会的な同一性、実存的な同一性、生存学的な同一性などに分けられている。そして異文化の中で生活してきた帰国子女が形成する文化的アイデンティティは社会的アイデンティティの枠組みに入る。

「文化的アイデンティティとは、国籍がどこであれ、日本人であるとかアメリカ人であるとかいうことからくる深い感情、ライフ・スタイル、立居振舞い、興味や好みや考え方を全部ひっくるめたるものをいうが、それはその文化の意味空間と密接な関係にある。」(箕浦 2003:246) や「文化的アイデンティティとは、自分がある文化に所属しているという(文化的帰属感)、あるいは意識(文化的帰属意識)である(鈴木 2008)」などとこれまで定義されてきた。

しかし、従来あった海外帰国子女のアイデンティティ研究は、「あなたは日本人ですか、それともアメリカ人ですか」といった雑で操作的定義を前提としたものばかりであった。アイデンティティとはなにかといった理論的検討がほとんど行われていなかった。そこで、南は長期にわたる帰国子女の調査を行うことによって、「アイデンティティ」という用語が指示する現象や経験の内実を明らかにしている。中でも、帰国子女のアイデンティティが形成される上で相互作用場面での経験、コミュニケーションが重要であると分析した。また、この相互作用にうまく参加しているという実感が彼・彼女らには必要であると考え、これを「機能的成員性」と呼んでいる。そして、アイデンティティは「機能的成員性」、つまり居心地が良いという感覚によって樹立されると結論付けた(南 1999)。

研究調査の中で、吉田は235人の中高生を対象に自らのアイデンティティにまつわるアンケートを行った。その結果、彼・彼女らが形成していくアイデンティティには、これといった要因ではなく、さまざまな要因が関わっていることが分かった。自らの経験の中で、日本人としてのアイデンティティを強く感じる者もいれば、外国人としてのアイデンティティの方が強く感じる者もいた。研究結果を見る限り、コミュニケーション能力を含めた言語能力が与えるアイデンティティへの影響はとても大きいことが分かった。

2.2 TCK のアイデンティティ

Third Culture Kids という言葉を聞いたことがあるだろうか。第三文化の子どもと定義される TCK は発達段階のかなりの年数を両親の属する文化圏ではない場所で過ごした子どものことである。母国文化を **first culture**、滞在先の文化を **second culture**、そして文化間を移動するという自体を文化として捉えることを **third culture** と定義される。あらゆる文化と関係を結ぶが、どの文化も完全に自分のものではない。

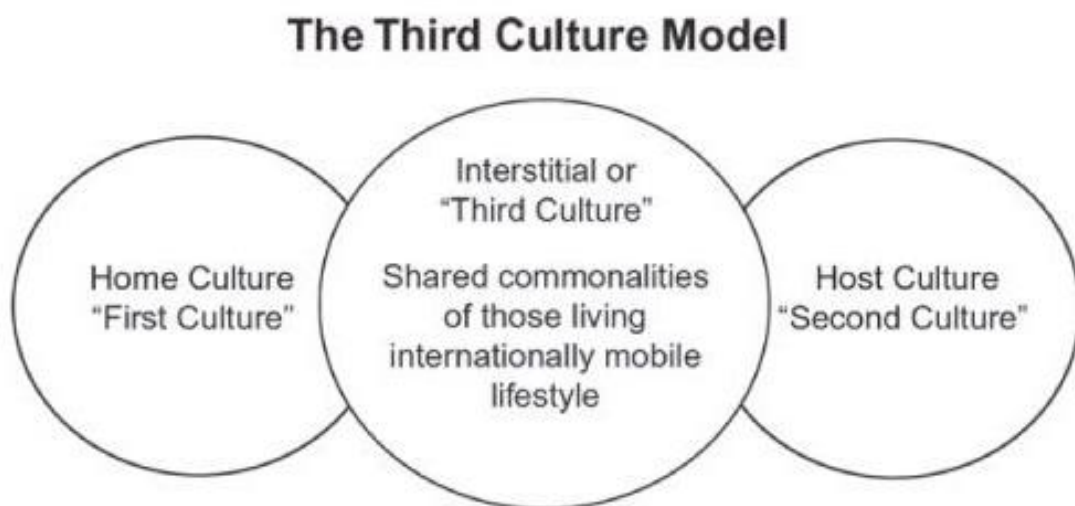


図 1. サードカルチャーモデル 1996.Ruth.E.Van.Reken

「帰国子女」という言葉は日本人にしか当てはまらないが、帰国子女も TCK の枠組みのひとつなのである。

日本に住む多くの日本人は日本で生まれ、幼少期から日本に住んで日本の文化や言語を身につけてきた。そして自分のアイデンティティが固定するまで他の国や文化に多大な影響を受けてこなかった。しかし、サードカルチャーキッドは、アイデンティティ形成前に異国の地に引っ越し、そこでの影響を受けてきた。

「帰国子女」ということばを聞いた時どのような印象を思い浮かべるだろうか。私は、「何

も苦勞せずに英語が話せる」、「うらやましい」、「社交的」、「調子に乗っている」、「変わっている」といった言葉をよく言われた。近年、帰国子女に関するさまざまな主観的印象が彼・彼女らに対する誤解を生む原因となり、どうしても彼・彼女らを一個人として見ることの妨げとなってしまっている。では、帰国子女とはどのような環境を経た者をさすか。本研究では、具体的に絞り、比較的若年期の価値観が未完成の段階で海外に渡っている子女のことを帰国子女と呼ぶことにしよう。それは「発達期のかなりの部分を彼・彼女らの親文化の外で過ごした人を指す。サードカルチャーキッドはひとつの文化に完全に所属することなく、すべての文化と繋がりを作る (Pollock & Van Reken 2009:13)」

3. アイデンティティのゆらぎ

帰国子女のアイデンティティを追求する上で、アイデンティティ・クライシスが関わってくることは第2章のTCKのアイデンティティからみて分かるだろう。「自分は一体何なのだろう。」そのような思いを抱く帰国子女がいることは事実である。私は、異国の地で様々な文化背景を持つ人々と若年期を過ごした帰国子女は、自分が何なのか・何者なのか、どこに帰属しているのか、自己意識を見失うことが多々あると思う。つまり、多くの帰国子女はアイデンティティを喪失していると仮説を立てることができる。

しかし、本研究で注目を置きたいものは重度なイメージがあるアイデンティティ・クライシスではなく、帰国子女の誰しもが経験しているアイデンティティのゆらぎというものである。おそらく帰国子女だけでなく、日本に生まれてずっと日本に住んでいた人も経験している可能性もあるだろう。「アイデンティティのゆらぎ」とは、簡潔に説明するとアイデンティティ・クライシスに陥る手前段階にあるものと考えていいだろう。自分自身のアイデンティティについて違和感を感じたり、アイデンティティ・クライシスまで深刻ではないが、自分とは何かについて悩んだりすることである。私自身もこうしたアイデンティティのゆらぎを海外生活の中で感じるが多々あった。そうした異国の地での生活の中で、多くの帰国子女はアイデンティティのゆらぎという壁にぶつかり、自身のアイデンティティについて考えるのだろう。また、そうしたゆらぎを帰国子女の多くが経験しながらも自己解決していることがある。そうした帰国子女は自身を客観的に見つめることができ、どこかでアイデンティティについて折り合いをつけることができている。自分自身が納得の

いく形でアイデンティティを確立しているのである。次章のインタビューでは帰国子女のアイデンティティの形成の仕方や彼・彼女らが考えるアイデンティティについて研究を通して説明していく。

4. 研究

4.1 研究内容

第1章でも先述したように、本研究は帰国子女のアイデンティティについて深く追求することを当初からの目的としていた。その研究対象として慶應義塾大学に在籍する学生に絞り、アンケートを行った。大学生を対象とした大きな理由としては、彼・彼女らの人格形成が完了している段階であり、「自分とは」について考えられる年齢だからである。また、慶應義塾大学に絞った理由は自分自身が所属している身近なコミュニティということもあるが、それ以上に慶應義塾大学のカラーに重点を置いたからである。慶應義塾大学は第1章でも説明したように、国際色豊かな学生が集まっており、日本でも比較的優秀な大学である。よって本研究における帰国子女は比較的優秀であり、すべての帰国子女のアイデンティティの追求として当てはめないでいただきたい。本研究はアンケートを23人の慶應義塾大学の学生に行った。性別や年齢もバラバラであり、滞在していた国もイギリス、アメリカ、シンガポール、韓国とそれぞれ異なっている。また23人のうち2人は帰国子女ではない。全く別の視点からも本研究を考察してみたかったため、帰国子女に対するイメージやアイデンティティについて調査を行った。インタビューでは主に彼・彼女らの経験に基づいた話や、アイデンティティに対する考えを伺った。以下がその調査報告と考察である。

4.2 研究結果

結果として、21人の帰国子女と2人のnot帰国子女にインタビューを行った。一人一人と直接インタビューを行い、できる限り堅苦しいものではなく、自然な会話の中でのインタビューを行うことを心がけていた。インタビューにおける内容がアイデンティティの形成や彼・彼女らの経験に基づいたプライベートな話であるため、そうした形式でのインタビューの方がより答えやすく本音に近いと考えた。一人あたり約45分に及ぶインタビューの中でいくつかの質問を事前に用意し、会話していく中で答えてもらった。

まず、私の中で彼・彼女らが「帰国子女」についてどのようなイメージを持っているのか気になっていたため、伺った。帰国子女ではない 2 人の学生からは「うらやましい」、「英語が話せてかっこいい」などのイメージと共に「苦勞してきたんだろうな」というプラスとマイナスの両方のイメージを持っていた。一方、帰国子女自身が抱くイメージとしては「個性の強さ」や「経験値が高い」などというもので、ネガティブなイメージを持っているものはあまりいなかった。以下インタビューからの引用。

「自分自身が帰国子女だからよくわからないが、比較的明るいのかなとは思いますが。あと、人生における経験が豊かなイメージがあります。」(男・21才)

「苦勞してきたんだろうなと思うことがある。その分、英語とかができていいなと思うこともありますが、、、」(男・20才) not 帰国子女

「自分もそうですが、下手に気を使っているイメージがある。見ていないようで、すごく周りを見ている」(女・19才)

「個性が強い。でもいろんな経験をしてきたからみんななんかしらの闇を抱えていると思う。」(男・20才)

帰国子女におけるイメージにおいては、帰国子女自身と帰国子女ではない者との間に少しのズレがあることが判明したが、一般的にイメージされている帰国子女のイメージとは大きな違いはなかった。次に異国の地で異文化や他言語を学ぶ中で感じることもあるカルチャーショックについて国内・国外問わず質問をした。多くの帰国子女がこの質問に対して「ある」と答え、彼・彼女ら自身のエピソードを話してくれた。以下インタビューからの引用。

「あります。話すときに人との距離が近いと帰国してから言われたことが何度かあります。」(女・19才)

「ある。言葉が通じなくて、言葉が通じないとこんなに大変なんだと思い知らされた。」(男・20才)

「あります。日本に帰ってきてからですけど、素でいることがいけないと思いました。個性を隠さなくては生きていけないこと。」(男・19才)

「ないかな。日本とアメリカにそこまで差を感じないからかもしれないけど、結構順応できるのかもしれない。」(男・21才)

旅行や留学経験ですらカルチャーショックを受ける人がいる中で、異国の地で長期間の滞在を経験した帰国子女がカルチャーショックを受けない方が珍しい。カルチャーショックという言葉はネガティブな印象を受けやすいが、これはあくまで「ショック」という言葉

がネガティブな意味を持つものだからだろう。文化の違いを肌身で感じた時の衝撃であり、マイナスな意味合いだけではない。カルチャーショックがアイデンティティの形成に大きく影響を及ぼしているかはわからないが、アイデンティティの確立や喪失とのリレーションは見られなかった。次に日本人である彼・彼女らが異国の地で暮らす中で、「日本人」であることを改めて実感した経験について質問した。以下インタビューからの引用。

「自分は小さいころ住んでいたの、クラス写真など見ると、自分が日本人なんだと思うことがあった。」(男・19才)

「自分の中のどこかに日本人としてのルーツがあるから、ちょっと日本人らしいことをしただけで日本人だなんて過剰に思った。日本人らしいことがうまく言えないけど。」

(女・19才)

「常に感じていた。」(男・20才)

引用した上記のインタビューは異なる意見のものである。実際にインタビューの中で帰国子女の多くが答えていたものは、「常に日本人であることを実感していた」であった。日本人がいない異国の地で生活するとはいえ、自分自身が「日本人」であることを忘れ、自身のアイデンティティを他国のものに確立することは難しいのだろう。多くの帰国子女が人種、宗教、文化などの違いから改めて自分の「日本人さ」に気付かされ、日本人であることを実感したという。そうした海外経験の中で、彼・彼女らが帰国し、自身のアイデンティティをどのように感じるのかを伺った。以下インタビューからの引用。

「少し違くなって思うところもたくさんある。」(女・19才)

「日本人であると感じる。でもそれは国籍だとか肌の色とか見た目においてであって、感覚だとか考えは日本人じゃない気がする。」(男・19才)

「帰ってきて日本人と一緒にいるとやっぱり日本人なんだなって思った。」(男・20才)

「日本人であることは分かっているんだけど、またなにか違うものもある気がする。」(男・22才)

異国の地での生活が直接的に彼・彼女らのアイデンティティ形成に影響を及ぼしていることが上記のインタビューからわかった。どこか自分自身と母国である日本で暮らす日本人との間に違いを感じたり、親近感を感じたりしたエピソードを聞くことができた。また、帰国後の日本での生活の中で彼・彼女らが考える「日本人」とは自分自身が違うと思う瞬間があるか質問した。以下インタビューからの引用。

「結構ある。あまりにも幼少期にたくさん移動したから、ずっと日本にいる人とは感覚が違うなっておもう。」(男・21才)

「ある。たまに話していて、アメリカだったらこうなだけどもあって思って、自分もそっち寄りなんだと思う。」(女・19才)

「日本人であるとは思いますが、それだけではないって断言できる。」(男・20才)

そして、自身の3章の仮説でもあげた、アイデンティティ・クライシスについての質問を行った。私は帰国子女の多くがアイデンティティ・クライシスを経験しているものだと考え、彼・彼女らのそうした経験について伺った。以下インタビューからの引用。

「アイデンティティ・クライシスに陥ったことはない。環境に応じて自分を作ったりしていたから、そういうときに少し感じたかもしれない、。」(男・20才)

「クライシスってほどのものではないけど、日本とアメリカにいた期間が同じくらいだから、なに人？って聞かれたときに一応、日本人って答えるけど、そうではないなって思うときがある。」(女・19才)

「ある。うまく人前で自分を出し切れないうちに感じる。」(男・19才)

「ないかな。そういう風に特に考えたこともなかったかな。」(男・21才)

自身の仮説とは異なり、慶應義塾大学に在学する多くの帰国子女がアイデンティティ・クライシスに陥っていなかった。彼・彼女らは自分自身をきちんと客観的に観察し、その中でアイデンティティに折り合いをつけていた。多くの帰国子女は自分たちが考える日本人(空気を讀んだり、発言を控えたり、周りと同じ行動をとったりする)との違いを受け入れながらもその中で日本人であることを受け入れている。日本人の中にも違いがあることを認め、しっかりアイデンティティを確立している。そして最後に、複数の異文化で生活をしてきた帰国子女にアイデンティティを1つに確立せず複数持つことに対する意見を伺った。以下インタビューからの引用。

「それはないと思う。複数あってもいいと思うし、それは人それぞれな気がする。」(男・21才)

「自分は確立しないままこうしてちゃんと形成できているわけだから、確立する必要ない。」(男・19才)

このように、アイデンティティを1つに確立する必要性については多くの帰国子女が「必要ではない」と答え、アイデンティティにおける寛容さが表れた。自分自身が納得のいく形でのアイデンティティであるならば、たとえ複数であってもいいと考えられる。今回のインタビューを通して、帰国子女のアイデンティティやその形成の仕方について多くのことがわかった。ただ、これといった定義できるものはなく、一人一人のバックグラウンドや経験によって変わるものが多かった。

4.3 考察

研究結果を通して、帰国子女におけるアイデンティティを一つのものとして定義することはできないことが分かった。21人の帰国子女の中でも一人一人さまざまな考え方を持っており、アイデンティティの形成の仕方は異なっていた。10年以上の海外経験を持ちながらも、「日本人である」と明確にアイデンティティを確立できている帰国子女。比較的海外経験も長いわけではないが、滞在していたタイに思い入れが強くアイデンティティを一つに確立する必要はないという帰国子女。中には滞在先の国が自分自身のアイデンティティだと考える帰国子女もいた。このように、帰国子女の中にもさまざまなアイデンティティの形成が行われており、「帰国子女のアイデンティティとは～」という形で定義することはできない。私は当初、こうしたアイデンティティの違いは地域や滞在年数が大きく影響していると思っていた。たしかに、研究を通してアメリカやイギリスといった地域（比較的滞在中に現地校に通う国）の方がアイデンティティの形成に影響を及ぼし、滞在年数が長い人ほどアイデンティティの確立に悩む傾向も多少はあった。しかし、これはあくまでスタートダッシュにすぎない。アイデンティティの形成における本質的なものは、彼・彼女らが置かれていた環境や彼・彼女らが実際に経験したことが重要なのだ。インタビューを通して、彼・彼女らの経験や過ごした環境は異質なものであり、アイデンティティを形成する上で大きな影響力だと感じた。実際にどのような環境や経験がアイデンティティを確立したり、アイデンティティ・クライシスに陥ったりという傾向は見られない。しかし、アイデンティティ形成の上での重要性は明確になったのではないだろうか。

また、アイデンティティ・クライシスにおいては、私自身が事前に立てていた仮説（異文化の中で長期間滞在する帰国子女はアイデンティティを喪失し、一つに確立することができないのではないだろうか）とは異なる結果となった。今回調査した21人の帰国子女の中でもアイデンティティ・クライシスというものに陥った経験がある帰国子女は2人だけだった。19人の帰国子女はアイデンティティの形成に違いはあるものの、アイデンティティを喪失した経験はなかった。第3章でも取り上げたように、彼・彼女らは「アイデンティティのゆらぎ」を経験することはあるがアイデンティティ・クライシスという重症なアイデンティティの喪失に陥っているわけではなかった。インタビューを通して、どこか自分自身でアイデンティティについて結論付けている部分を感じた。

そして、今回の研究から大きくわかったことは2つである。1つ目は帰国子女のアイデンティティを一つのものとして定義することはできないこと。2つ目は多くの帰国子女がアイデンティティ・クライシスに陥ることはなく、さまざまな経験や環境の中で独自のアイデンティティを確立していること。すべての帰国子女がオンリーワンの経験や環境の中で幼少期を海外で過ごしており、私たちは彼・彼女らを一つの「帰国子女」という括りで定義することはできない。これは彼・彼女らのアイデンティティについても同じことが言えるだろう。私たちが彼・彼女らを帰国子女ではなく、一人一人として向き合う必要があり、その中で見えてくる共通点や傾向を吟味し、これからも変化していくであろうアイデンティティを追求していかなければならない。

Interviewer

小倉健太郎 慶應義塾大学3年 (男・21才) 香港・アメリカ

Interviewee

(帰国子女)

| | | | |
|---------------|-----|------------------|----------------|
| 2016/8/12 実施 | Uさん | 慶應義塾大学3年 (男・21才) | イギリス・アメリカ |
| 2016/8/17 実施 | Aさん | 慶應義塾大学1年 (男・19才) | アメリカ |
| 2016/8/17 実施 | Oさん | 慶應義塾大学1年 (女・19才) | アメリカ |
| 2016/8/18 実施 | Nさん | 慶應義塾大学3年 (男・20才) | シンガポール・アメリカ・韓国 |
| 2017/11/7 実施 | Sさん | 慶應義塾大学4年 (女・22才) | アメリカ・シンガポール |
| 2017/11/7 実施 | Kさん | 慶應義塾大学4年 (男・21才) | タイ |
| 2017/11/7 実施 | Hさん | 慶應義塾大学4年 (男・22才) | アメリカ・台湾 |
| 2017/11/13 実施 | Tさん | 慶應義塾大学3年 (女・21才) | 中国・韓国 |
| 2017/11/13 実施 | Oさん | 慶應義塾大学4年 (女・23才) | パキスタン |
| 2017/11/14 実施 | Mさん | 慶應義塾大学2年 (女・20才) | イギリス |
| 2017/11/14 実施 | Iさん | 慶應義塾大学4年 (男・22才) | 香港・マレーシア |
| 2017/11/18 実施 | Sさん | 慶應義塾大学3年 (男・21才) | アメリカ |

2017/11/18 実施 Hさん 慶應義塾大学3年(男・21才) イタリア・ドイツ
2016/11/20 実施 Kさん 慶應義塾大学2年(女・20才) アメリカ
2016/11/22 実施 Mさん 慶應義塾大学3年(男・21才) イギリス
2016/11/22 実施 Hさん 慶應義塾大学3年(男・21才) フランス・アメリカ
2016/11/20 実施 Sさん 慶應義塾大学2年(男・20才) 香港

(not 帰国子女)

2016/8/12 実施 Tさん 慶應義塾大学3年(男・20才)

2016/9/3 実施 TOさん 慶應義塾大学3年(男・21才)

参考文献

黒羽カテリーナ^[1]、(2013)、「帰国子女は文化的アイデンティティをどう体験しているのか-2つの事例を対話的 自己論の視点から検討する」、『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』

Pollock, D.C., & Van Reken, R.E.^[2] (2009), *Third Culture Kids: Growing Up Among Worlds*. Rev. Ed. Boston: Nicholas Brealey Publishing.

箕浦康子^[3]、(2003.2)、『子供の異文化体験：人格形成過程の心理人類学的研究』(増補改訂版) 新思索社

南保輔、(2000)、『海外帰国子女のアイデンティティ—生活経験とつ文化的人間形成』、東信堂

鈴木一代、(2008)、『海外フィールドワークによる日系国際児の文化的アイデンティティ形成』、ブレーン出版

外務省ホームページ『海外在留邦人子女数統計(長期滞在者)』、
http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin_sj/